

## &lt;全体分析&gt;

試験時間 90 分

## 解答形式

マーク式・論述式

## 分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)難易 (易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

解答数は、マーク式が 39 問 (内訳は、空欄補充 6 問、単答式 0 問、正誤 32 問、年代整序 1 問)、論述式が 2 問 (200 字と 240 字)。昨年度はマーク式 40 問であったので、今年度は 1 問減少しているが、その内訳は、空欄補充 (昨年度 11 問) と年代整序 (昨年度 5 問) が大幅に減少し、単答式 (昨年度 11 問) が消えた一方、正誤問題 (昨年度 12 問) が大幅に増えたので、負担としては大きくなつたと思われる。しかし、昨年度から導入された論述問題は、総字数が昨年度の 600 字から 440 字へ減少したので、全体の分量としては変化なしと判断した。正誤問題の中には依然として細かな知識を要求するものも見られるが、従来の法学部の問題に比べれば平易な問題が増える傾向が続いており、論述問題も新規に導入された昨年度よりも制限字数が減少し、比較的書きやすい内容になっているので、全体として難易度はやや易化と判断した。

## 出題の特徴や昨年との変更点

従来の法学部は、長めの文章中の空欄に 30~50 程度の語句を並べた語群から該当するものを補充させる問題が特徴的だったが、今年度の空欄補充問題は、文章は短く、語群の語句の数も 20 程度となり、設問数も半減した。逆に正誤問題が中心になったことが、最も大きな変更点である。

## その他トピックス

III (51) (52) ~ (55) (56) の空欄補充問題については、2025 年度基礎シリーズ「完全習得タイム」第 6 回でほぼ同様の問題を出題した。III 設問 5 の論述問題については、2025 年度基礎シリーズ「完全習得タイム」第 6 回でオスマン帝国の 2 種類の軍団についての論述問題を出題した。IV 設問 6 の論述問題については、2025 年度高校グリーンコース 1 学期「世界史論述」で 17 世紀の英蘭関係について 250 字以内で述べる問題を扱った。

## &lt;大問分析&gt;

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	マーク式	徴税制度の歴史 (古代～近代)	(1) (2) [01] 王莽は周代に行われたとされる井田制の復活を図って土地の売買を禁止したが、消去法でも難問。[04] 奴婢への給田が廃止されたのは煬帝の時代なので、誤文とも言える。(11) (12) [03] 「觀音猿鶴図」は南宋の牧谿の作品で、徽宗の代表作は「桃鳩図」だが、正文の内容も細かく、消去法でも難問。(15) (16) [01] 大明宝鈔は銀と兌換不可。[04] 盛世滋生人丁のことで、康熙帝の時代。(19) (20) [04] アウラングゼーブ死後のこと。(15) (16)・(19) (20) は、誤文は細かい内容を含むが、正文を選ぶことは可能。(21) (22) [02] チオンピの乱は、ミラノではなくフィレンツェで起こった毛織物業の下層労働者の反乱。正文も細かい内容が含まれるので消去法でも難しいが、チオンピの乱は、難関私大でしばしば出題されるので、この機会に知っておいてもよい。	やや難
II	マーク式	国語とナショナリズム (古代～現代)	(27) (28) [01] イギリスは万国電信連合の原加盟国ではない。(35) (36) [01] 顧炎武は清に仕えていない。(27) (28)・(35) (36) は、誤文の判断は難しいが、消去法で解答可能。(39) (40) [02] 琉球藩の設置 (1872) は、台湾出兵 (1884) より前。(45) (46) [03] ヒンディー語はインド北部の口語。	標準

III	マーク式論述式	トルコ系民族の歴史(中世・近世)	<p>(59) (60) 「下線部(イ)の王朝」はセルジューク朝。</p> <p>(61) (62) [02] エスナーフは、オスマン朝における同業組合で、都市部の市場で活動した。[03] オスマントルコ系以外の民族も能力に応じて登用された。</p> <p>[04] オスマントルコ系以外の民族も能力に応じて登用された。</p> <p>(63) (64) 「下線部(エ)の王朝」はマムルーク朝。</p> <p>設問5. 論述問題で求められる記述は、教科書に書かれている基本的な内容が中心なので、問題の要求を漏らさず答えていくことが重要である。本問の論点として、オスマン朝の主力の2種類の兵について、それぞれ「どのような特徴を持ち」「どのような制度に基づき軍役に就いていたのか」を説明した上で、16世紀末から「どちらの種類の兵がどのような軍事上の変化のために衰退していったのか」が問われている。「2種類の兵」が、シバーヒーとイェニチエリであることが分かれば、大きくはずれた答案にはならないだろう。16世紀以降衰退していくのはシバーヒーで、衰退の要因は様々あるが、本問では「軍事上の変化」に限定されていることにも注意。</p>	標準
IV	マーク式論述式	17世紀のヨーロッパ諸国	<p>(65) (66) [04] (1613) → [03] (1648) → [02] (1651) → [05] (1673) → [01] (1690)。[04] が17世紀前半、[02] [03] が17世紀半ば、[01] [05] が17世紀後半のことである。[02] [03] の前後関係は細かいが、4番目を選ぶ問題なので、イギリスで王政復古後の出来事である [01] [05] の前後が分かれば解ける仕組みになっている。設問6. 「17世紀前半のアジアにおけるオランダとイギリスの競合」「17世紀後半のヨーロッパにおけるオランダとイギリスの関係」の2点について、地図A～Dの地名と1651年・1689年のそれぞれに起きた出来事に触ながら論述することが求められている。教科書レベルの知識で様々なことが書けそうだが、要求されている論点も多いので、過不足なくまとめられるかがポイントとなる。</p>	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

### ＜学習対策＞

慶大法学部の入試問題では、戦後(第二次世界大戦後)史・文化史などがよく扱われる。ほかの入試問題ではあまり見られない、いわゆる難問も出題される。対策としては、過去問研究に時間を割き、そのうえで重点をおくべき第二次世界大戦後の東西対立などに関する丁寧な学習を心がけたい。難問については、消去法も大きな武器となるだろう。さらに、昨年度から法学部は、新科目の歴史総合と論述問題を世界史入試で採用した。歴史総合については、従来の世界史入試の範囲でも対応できるもののが多かったが、教科書レベルの内容の対策は必要であろう。論述問題については、来年度以降も今年度のような本格的な論述問題が出題されることが想定されるので、早めに論述対策をしておくことが望ましい。